
【巻頭言】

運動疫学研究会の「これまで」と「これから」

種田 行男¹⁾

1) 中京大学情報理工学部

運動疫学研究会発足当時（平成 10 年）、我が国の体力科学分野では運動生理学や生化学的研究が主流でした。もちろん、身体活動や運動と健康の関連を検討する研究も実施されていましたが、疫学的手法を用いた研究はわずかに過ぎませんでした。その結果、我が国には保健あるいは体育行政の方針決定に活用できる **evidence** の蓄積が乏しく、体力科学の疫学的分野からの貢献は十分とはいえませんでした。また、体力科学分野においても疫学的な知識と手法が求められる時代の到来とともに、体力科学の疫学的研究者層の薄さが問題視されるようになりました。このような状況の中で、体力科学の分野に疫学的手法を積極的に取り入れていくことを目的として「運動疫学研究会」が発足しました。

初代会長の下光輝一先生は本研究会の目的を「第一に、体力科学の分野において疫学的手法を用いた質の高い研究を数多く生み出し、もって我が国と世界の健康増進・疾病予防に貢献すること。第二に、21 世紀の体力科学研究と運動疫学研究を担う若い研究者を育成すること」と、機関誌の運動疫学研究第 1 巻に綴っておられます。また、運動疫学研究会会則第 2 条には「体力科学、疫学の両分野を融合し、その促進をはかり、疫学的手法を用いた健康科学の発展に寄与することを目的とする」と定められています。

研究会発足から 12 年が経った今、運動疫学研究の **mission** と **objective** を再確認するならば、本研究会の **mission** は我が国のすべての国民が身体活動・運動を通じてより良い健康状態を獲得することであり、**objectives** は①身体活動と健康に興味をもつ研究者や実務家のために研究発表の場を設けること、②身体活動と健康に関連する教育活動を通じて会員の専門能力の向上を図ること、③関連学術団体との連携事業や国際交流を行うこと、④国民が身体活動を実践するための機会の増加とそのための環境整備の必要性を行政や関連団体に対して唱道することと考えられます。

これらの **mission** と **objectives** を達成するための活動として、本研究会は学術集会の定期開催、機関誌「運動疫学研究」の発刊、運動疫学セミナーの開催、日本体力医学会の年次大会でのシンポジウムの企画・開催などを行ってきました。学術集会は平成 10 年 9 月にかながわ労働プラザ（横浜）で第 1 回が開催され、これまでに 13 回の学術集会が行われています。機関誌「運動疫学研究」の創刊は平成 11 年度であり、これまでに 13 冊が発行されています。会誌の内容は原著論文、学術集会の講演・発表抄録、運動疫学セミナーレポートなどです。平成 22 年度からは投稿論文の掲載数が大幅に増え、平成 23 年度からはこれまで年 1 回であった発行を 2 回にする予定です。

運動疫学セミナーは平成 22 年度に第 11 回目を開催し、これまでの延べ受講者数は約 300 名にのびりました。これら受講者の専門分野は体育学のみならず、栄養学、理学療法学、看護学、健康教育学、公衆衛生学、心理学など幅広い分野から集まっています。また、大学や研究機関などの研究者の他に、行政や企業で健康づくりに携わる実践者の受講も増加しています。「疫学をじっくり学ぼう」とする方は 1 度の参加では物足りないようで、繰り返し受講するリピーターが多いことが本セミナーの特徴です。そこで、第 5 回目からは既受講者を対象にアドバンスコースを開設し、従来のプログラムをベーシックコースとして 2 つのコースを設置しています。

平成 22 年度までに、運動疫学研究会が企画して日本体力医学会の年次大会にて開催したシンポジウム・パネルディスカッションは 8 回、基調・教育講演は 4 回、およびその他のセッションは 4 回でした。また、平成 13 年度、16 年度、および 18 年度の年次大会では、運動疫学研究会の会員らが日本体力医学会の研究助成を受けて実施したプロジェクト研究の成果報告がなされました。日本体力医学会の年次大会における発表・報告機会の増加は、運動疫学研究の重要性が日本体力医学会の中に浸透した結果と考えられます。

質の高い研究会活動を実施・継続していくためには、良い人材が多数必要です。平成 22 年度から会長・副会長をはじめ、運営委員の約半数が変わりました。退任された役員の方々のこれまでのご尽力に深く感謝いたします。先人が築いてきた本研究会のステータスを更に高めるための努力が求められています。そこで、委員会組織の充実による人材の活用および業務分担による効率的な研究会運営を目指します。具体的には、既存の編集委員会とプロジェクト研究委員会に加えて、学術委員会、セミナー委員会、広報委員会、および総務委員会を新たに設置しました。これらの委員会では多くの若手研究者に委員としてご尽力いただいていることから、会員へのサービスは質・量とも包括的に改善されつつあります。

平成 23 年度は運動疫学研究会が新たなステージに進む年であると考えています。その手順としては、運動疫学研究会が存在する意義や目的を問い直し、目的を達成するための具体的な計画を立案実行し、その成果を客観的に評価することです。これら一連の作業は会の役員や委員らが主としてリードすべきですが、おそらくそれだけではすべてを実現することはできないでしょう。私が運動疫学研究会に入会した動機を振り返ってみますと、会が発信する学術的情報に触れることによって、自分自身に多くの利益が得られることを期待したからでした。会を運営する側はこのような会員のニーズを踏まえて、会員に役立つサービスを常に提供しなければなりません。これは容易なことではありませんが、そうすることによって会員は会を大切に思うようになり、やがては自分が得た利益を会のために還元する気持ちが芽生えることでしょう。運動疫学研究会はこのような循環で会を発展させていきたいと考えています。この好循環へのみなさまのご参加を心からお待ちしています。